

■ 書 評 ■

金 泰泳 [著]

『アイデンティティ・ポリティクスを超えて－在日朝鮮人のエスニシティ－』

中京大学 ましこ・ひでのり

本書は在日コリアン3世による民族論。舞台は現代の日本列島。重点がおかれている領域は、「定住外国人」中、依然主流をしめるコリア系住民のアイデンティティである。

しかし、民族的少数派としてアイヌ／琉球／ニューカマー、社会的少数派として被差別部落／障がい者／女性などの状況と経緯も言及される。冒頭部分のこういった比較対照により、少数派の被差別状況とアイデンティティは、多数派との関係性において、同質の問題をかかえていることがあきらかにされる。本書の第1の価値は、こうした整理にある。

少数派が共通してかかえる相克をあまり認識してこなかった読者はおどろくだろう。独自性の強調にもとづく求心力＝対抗アイデンティティの形成が多数派からの差別を誘発してしまうというジレンマ。そして、「一枚岩」イメージが、そこにおさまりきれない内部の個人／小集団を抑圧するというジレンマである。差別をおそれることなく「在日らしさ」を表現できる時代がやってきたとか、独自性の相互理解と共存共栄が必要だといった楽観論は時期尚早だということだ。

*

本書は、少数派出身の著者が、少数派の苦悩をあまりに「正直」にかかった作

品ともいえる。民族学校などで強調されてきた民族性も、維持／継承が硬直化すると、社会の変動とかみあわなくなったり、わか世代の多様な生活感覚／アイデンティティにとって、あしかせとなったりする。既存の民族教育や多数派日本人の視線を気にしすぎた「アイデンティティ・ポリティクス」はのりこえていかなければならないと率直に指摘することは、たとえば3世代にとっては、さけることのできない論点だろう。だが、こうした少数派がかかえこむジレンマを多数派読者にさらすことは、現状では両義的な気がする。

まず、少数派がせおわされた「アイデンティティ・ポリティクス」という重荷の原因はホスト社会＝多数派にあるのに、そこから結局は視線がそれてしまうのではないか。さらには、「この難題を打開するカギはなにか」といった、多数派研究者の（主観的には真剣な）知的ゲームにかっこの素材を提供しかねないといった事態も懸念される。

本書は、帯カバーにもあるとおり「ゆれうごく民族アイデンティティ」の「ジレンマの超克を模索する」作品だが、「超えて」すすむべき具体的方向性をえがくことには成功していない。もとより「アイデンティティ・ポリティクスを超

えて」がんばるべきなのは、主体としての「在日」ではない。かわるべきなのは少数派との関係性を形成／維持する多数派のアイデンティティのほうであろう。しかし本書は、多数派に安易に「共生」をかたるなとせまる以外、おおくをもとめない。読者の大半はおそらく多数派であろう。その意味で、本書は所期の目的＝かたるべき潜在的読者層の設定に失敗しているのではないか？

また多数派の知識人が「現実的な処方箋」などにとりくむと、既存の矛盾を前提とした「打開策」が提言されたりしがちだ。現実の「在日」のアイデンティティが多様だから、複雑な葛藤があることは当然だとして、そこでの諸個人のポリティクスをあたまごしにかたる権利が、多数派にあるだろうか？ かりに「覚醒」した層が多数派にいるとしても、彼（女）らの責務は少数派の状況への分析、コメント、助言などではないだろう。少数派研究は、そこにうつしだされる多数派の像の直視と、多数派の態度変容をどうみだすかという実践的理論の構築にこそ意義がある。まずは多数派がわの諸個人の言動や行政サイドの政策施策に差別意識や構造的矛盾をみだし、少数派に差別実態の挙証責任をおしつけさせない社会づくりに具体的に貢献するための理論構築をすることこそ、社会学／教育学のやくわりではないか？

*

ところで本書は、集団の独自性を強調する本質主義、その神話性をあばきたてる構築主義、双方に距離をおく。どちらか一方だけでは少数派の諸個人のアイデ

ンティティを説明できないとして、少数派知識人の知的ジレンマも率直に提示する。ある意味で、関係者には自明なジレンマの突破の必要性をときながら、未完におわったという意味でも、苦渋にみちた作品といえよう。この理論的ジレンマ自体、源泉は多数派日本人が形成し維持している関係性にあると自覚できる読者にめぐまれば、多数派の「みにくい自画像」をうつしだす、絶好のテキストになるはずだが。その意味では、本書は多文化教育／国際交流関連の研究者にこそ読んでほしい。多数派発の共生／共存論が、結局は多数派に好都合な「からめとり」の論理として機能するという現実に鈍感な「主観的良識派」ではなかったかどうか、自己点検するためにも。

*

こまかい点で、記述に疑問もなくはない。たとえば、現在では「在日」の結婚相手の約8割は日本人だとする(104, 134頁)。しかし、ここでいう「日本人」に日本国籍を取得した元「在日」もふくまれていることへの言及がないのは議論を単純化しすぎだろう。

むろん、本書の大半をしめる「在日」の多様性と動態は、それを記述する筆者の苦悩もふくめて、社会学／教育学にとって魅力的な理論的源泉である。多数派日本人という存在。それを再考する意志のある研究者／教育者ならば、データを読みこむだけでも意味があるだろう。苦言ばかり呈したようだが、このことは、強調してしすぎということはない。

◆四六判 214頁 本体1,900円
世界思想社